

19. 肥育飼料一本化体系における雌牛の枝肉成績向上の取り組み

農林水産研究指導センター畜産研究部・南部振興局¹⁾

○石本 歩・手島久智・塩崎洋一¹⁾

1 背景・目的

近年、黒毛和種の肥育素牛価格は上昇し、高騰が続いている。そのため、肥育経営において収益性を高めるには、枝肉重量の増加と商品価値の高い枝肉作りが求められており、特に枝肉重量の小さい雌肥育では早急な改善が必要である。

また、当研究部では、素牛の導入から出荷までの全期間を1種類の配合飼料（とよのくにエクセレント）で飼養管理する体系（以下「エクセレント体系」）を確立し、本県の肥育経営の改善に一定の成果を上げてきたが、本体系は去勢牛での実証を主体に確立したものであるため、雌牛の枝肉成績向上に向けて体系の見直しに取り組むこととした。

2 内容

- (1) 肥育前期の蛋白質の給与量が、枝肉重量やロース芯面積の大きさに与える影響について、エクセレント体系の実証農場である JA 肥育センター N 農場で調査した。
- (2) 調査対象牛は平成 25 年 9 月から 12 月にかけて導入された雌牛とし、導入月により蛋白質の給与量に違いを設けた。
- (3) 蛋白質の給与量は大豆粕の給与により調整し、導入月毎に大豆粕の最大給与量到達時期（以下「最大到達期」）を変えた。なお、大豆粕の 1 日あたりの最大給与量は従来体系より 300g 増量して 800g とした。

3 結果および考察

- (1) 枝肉重量は、大豆粕の最大到達期が早まるにつれて大きくなる傾向を示し、最大到達期が最も早い 12 月導入では 460kg となった。
- (2) ロース芯面積は、大豆粕の最大到達期が早まるにつれて大きくなる傾向を示し、12 月導入では 60 cm²となった。

以上のことから、肥育前期における大豆粕による蛋白質の増給は、筋肉形成を促進し、枝肉重量およびロース芯面積の改善に効果があると考えられ、商品価値の高い枝肉作りに有効な手段であると思われた。

4 今後の課題

- (1) 雌牛において大豆粕の増量による枝肉成績向上の効果が確認できたことから、去勢牛での効果についても確認する必要がある。
- (2) 大豆粕は分解性蛋白質（DIP）であるため、増給しすぎると尿のアルカリ化の原因となり、特に去勢牛においては尿石症の一要因となることから、給与量の上限について検討する必要がある。
- (3) バイパス蛋白質の給与により子牛の発育改善を実証している事例もあることから、肥育前期におけるバイパス蛋白質給与が枝肉成績に及ぼす影響について調査する必要がある。